

研究者からのメッセージ

研究

—けんきゅうびより—

日和

Vol.
07

研究は楽しい。

膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。

それまでわからなかったことを解き明かす感動、

そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。

ここにあるのは、

「なぜ?」「好き」をとことん追究する、

そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。

その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って

輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。

P.02



[Case #01](#)

「なぜ?」に突き動かされ、
夢中で研究してきた

金森 絵里
経営学部 教授

P.04



[Case #02](#)

研究も仕事も人生も楽しむ。
だから困難も乗り越えられる

廣野 美和
グローバル教養学部 准教授

P.06



[Case #03](#)

迷い、悩んだ道のりが
今につながっている

福山 智子
理工学部 准教授

P.08 活動紹介

なぜ自然破壊が起きるのか 答えを探して研究の道へ

「なぜ、自然破壊が起きるのだろうか」。そんな疑問を抱いたことが、研究者としての今につながる出発点でした。

生まれたのは、美しい自然に恵まれた場所。家の周りには田んぼの緑が広がり、夏には近くの川に蛸が飛ぶような田舎で育ちました。地域の小中学校が環境教育に熱心だったこともあり、いつしか自然環境保全に関心を持つようになりました。当時主流だったのが、自然破壊の元凶は利益だけを追求する企業であるという論調です。「なぜ企業は、自然を破壊してまで利益を追求するのか」。その答えを見つけ、自然を守ることに役立ちたいと思い、経済学部に進学しました。

しかし大学の4年間では答えを見つけることはできず、もう少し勉強しようと大学院へ。企業の活動を理解するにはまず会計を知る必要があると思い、会計学を学び始めました。会計学は奥が深く、知識修得で瞬間に2年が過ぎました。修士課程を終えても依然として謎は解けない。疑問を解き明かしたい一心で博士課程に進みました。

大震災と原発事故を契機に 立ち返った初心

会計学の知見をさらに深めるチャンスを得たのが2004年、立命館大学で教鞭を取っていた時です。学外研究制度を利用し、会計史の研究で世界的に有名なイギリスのカーティフ大学に留学しました。当時産まれたばかりの子どもを連れての渡英でしたが、迷い

はありませんでした。

一緒にイギリスに渡った夫と母親の助けを借り、子育てをしながら大学に通う日々。現実には想像していた以上に大変でした。けれど子どもがいたおかげで地域の方々との関わりが増え、大学以外にも世界が広がるなど、良いこともたくさんありました。

一方、生活以上に苦戦したのが学業です。まずぶつかったのは言葉の壁。最初は講義を満足に聞き取れず、自分の意見も思うように伝えられず、途方に暮れました。けれどそれを乗り越えた後は、多くのことを学びました。特に歴史的・哲学的な側面から会計学を捉え直せたことは、大きな収穫です。5年をかけてPh.D(博士号)を取得しました。

最大の転機は2011年、東日本大震災とその後の原子力発電所の事故です。企業活動が恐ろしい自然破壊をもたらす現実を目にして、「自然を守りたい」と研究者を志した時の思いが再び湧き上がってきました。以来現在まで原発事業の会計について研究しています。

会計学の視点で自然破壊を論じるのが難しいのは、その影響を正確に計算できないことにあります。原発事故によってどれほど自然が破壊され、その回復に膨大な年月がかかるとしても、その確かなコストを見積ることはできません。「会計によって企業の行動を説明できれば、自然を破壊する行動を抑えられるのではないか」と考えてきたものの、限界にぶつかり、打ちのめされる思いでした。しかし「会計に限界がある」と訴えられるのも、専門家だからこそです。そう考え、過去の会計担当者たちが経済活動をどのように数値化しようとしてきたのかを明らかにし、今後再び原発

事故を起こさないためには何が必要なのか、会計学の観点から探り続けています。

「知りたい」という気持ちが 研究を続ける力になる

原発の会計というテーマを定めてからは、居ても立ってもいられず、無我夢中で研究に打ち込みました。夫と協力し、4人の子どもを育てながら論文執筆はもちろん、土日に行われる研究会や海外の学会にも積極的に参加。立命館大学の協力的な雰囲気にも助けられました。例えば子どもを保育園に迎えに行くため、夕方の会議を途中で抜けなければならぬ時も、快く送り出してもらいました。そうした多くのサポートがあって今があります。

振り返ると、これまでずっと心の内の「なぜ？」に突き動かされて前に進んできました。研究者を目指す皆さんにも、「これについて知りたい」「研究したい」という強い気持ちを持ってほしい。それがどんな時も研究を続ける力になるはずです。

私自身の研究者としての道もまだ途上。これからは研究で得た知見をより広く社会に発信することにも力を入れるつもりです。



Case #01

「なぜ？」に 突き動かされ、 夢中で 研究してきた

金森 絵里

経営学部 教授

Profile

1996年、京都大学経済学部を卒業後、京都大学大学院経済学研究科で修士および博士課程を経て、2000年、立命館大学経営学部に着任。在任中の2009年、イギリスのカーティフ大学に留学。2014年に経営学部教授に就任。

研究も仕事も 人生も楽しむ。 だから困難も 乗り越えられる

廣野 美和 グローバル教養学部 准教授

Profile

1999年、慶應義塾大学を卒業後、同大学院を修了。2007年、オーストラリア国立大学で博士課程を修了後、2008年、イギリスのノッティンガム大学に赴任。約7年間を過ごした後、2015年立命館大学国際関係学部に着任。2019年から現職。

アジアに対する見方が一転 その衝撃が研究の原点

もともと興味を持っていた中国の国際関係について、「研究したい」とはつきり意識したのは大学4年生の時でした。高校までの歴史の授業では、19世紀、西洋からアジアに「主権国家」や「国際法」などの概念がもたらされ、近代化していったと習ってきました。ところが大学の授業で学んだのは、アジアの国々はただ従属的に受け入れたのではなく、その内側で起こっていたさまざまなダイナミズムの中で西洋化の波を受け止め、自ら変容を遂げていったことでした。そこでアジアに対する見方が一転した体験が、研究の道へ進む第一歩でした。

修士課程2年生の時、交換留学で1年間オーストラリア国立大学 (ANU) へ。最初は英語に苦しみましたが、後に夫となる人やかけがえのない友人との出会いもありました。また研究においても、学術分野に縛られず、中国の国際関係について理論と実証の両面から追究できる環境で、研究指針を見定めることができました。「ここで研究を続けたい」。そんな気持ちが膨らみ、修士課程を修了後再び渡豪。ANUの博士課程に進学しました。

知りたいのは現地の人々が どう考えているか

一貫して関心を持っているのは、国際社会における「強者」が、自分たちの論理で「弱者」である国々を「文明化 (civilizing)」しようとした時、受け手はそれをどう認識するのか。現在は、かつて「弱者」だった中国が近年自らの

アイデンティティを「大国」に変え、今度は強者の立場で東南アジアやアフリカに援助・投資していることに注目しています。そうした中国の動向に賛否両論がありますが、重要なのはそれらを受け入れる人々がどう考えているのかです。私は現地の人々の認識を捉えるため、カンボジアやインドネシア、ネパール、リベリアなどに足を運び、現地調査を行ってきました。現実には多様性に富んでおり、文献に書かれていることとはまるで違う事実が見つかることも少なくありません。そうした現地でしかわからないことを調べるのがフィールドワークのおもしろいところです。

2008年にはイギリスのノッティンガム大学に職を得て、渡英しました。フィールドワークで世界の様々な場所に行き、子どもも出産し、研究も生活も充実していましたが、転機は突然訪れました。国の移民政策によって、国外に退去しなければならなくなり、生活の基盤も仕事も失うことになったのです。折しも見つけた立命館大学の求人公募に応募し、2015年、イギリスから京都にやってきました。

「できる」と信じ 楽しんで続けてほしい

現在は研究活動に加えて大学の講義、さらにはグローバル教養学部の副学部長として学部運営にも携わっています。新しいことに挑戦できるまたとない機会が、楽しみながら動いています。大学教員が自分の天職だと思う瞬間は様々ありますが、やはり、教えた学生・生徒の成長を目の前で見るのは本当に特別です。高大連携プログラムで高校生を前に講義をした時、教え

たことを目を見張る勢いで吸収し、伸びていく生徒たちを見て、改めて「未来を育てる」喜びを実感しました。現在は、附属校生と学部生を伴ってネパールに赴き、現地で学ぶ海外研修プログラムを計画しています。受講生たちがどう成長するのか、今から胸が躍ります。

研究者を志す人の中には、将来結婚や子育てなどと両立できるか不安に思っている人がいるかもしれませんが、確かに体力ぎりぎりの時もありますが、子どもに活力をもらっていることも事実です。子どもに研究について話すことが自分の糧になるし、また親が夢中で仕事をする姿を見せることが、子どもにとってもいいキャリア教育になると思うからです。

一人ひとりが個別の課題を追究する研究者は、研究をどのように発展させていくか、自分でマネジメントしなければなりません。私は常に5年後の目指す姿を思い描き、それを指針とするようにしています。できるかできないか、未来は誰にもわかりません。けれど「できない」と思った瞬間に「できない」ことが決まってしまう。「できない」を決めるのは自分自身なのです。皆さんには「できる」という気持ちを大切に、楽しんで続けてほしいと思っています。



「消去法」の結果から 始まった研究者人生

高校1年生まではどちらかというと国語が得意だった私が理系を選んだのは、「ちょっと格好良さそう」という軽い気持ちからでした。大学では工学部の中でも建築系を専攻。正直に言うと、コンクリートの研究との出会いは、「消去法」の結果でした。4回生で研究室を選ぶ時、建築分野の中でデザインや環境にはあまり興味を持たず、かといって構造は計算が多くて苦手意識があり、選びあぐねた末に、恩師となる谷川恭雄先生や小説家としても名を馳せていた森博嗣先生に惹かれ、行き着いたのが、建築材料の研究室でした。

退官が決まっていた谷川先生の勤めもあって、卒業後は東京大学の大学院に進学。そこでコンクリート中の鉄筋腐食に関する研究をスタートさせます。それは、長い暗黒模索の日々の始まりでもありました。

大学院、特に博士後期課程では、自分でテーマや手法を決め、自力で研究を進めていかなければなりません。自分自身の興味を深く掘り下げた経験のなかった私は、何に着目



し、どのように研究に取り組みばいいのか確信が持てず、何年も悩むことになりました。

強く意識するのは 社会にどう生かすか

「研究者になろう」と心を決めたのは、博士課程に進学してからです。修士からの研究に引き続き、鉄筋腐食診断の技術をどのように実現したらいいか悩んでいた時、企業の技術者の方から「電気化学ノイズ法を試してみたらどうか」と助言を受けたことが、前途を開ききっかけになりました。電気化学ノイズ法は電位や電流から金属表面で起きている反応を捉える手法です。主に金属分野で使われており、日本における建築分野への適用は、これまでにない試みでした。私はこの手法を用いてコンクリート中の鉄筋の腐食を診断する方法を考案し、博士論文にまとめることができました。

悩みながらも研究のおもしろさやごたえを感じられるようになったのは、それからです。特にモチベーションが高まるのは、研究の先に社会への応用が見えた時。頭の中に渦巻いている課題を整理し、「もしこれを明らかにできれば、社会でこんな風に役に立つかもしれない」と気づくと、がぜん興味がわいてきます。

社会への応用をさらに強く意識するようになったできごとがありました。それは2011年、東日本大震災後の現地調査に参加したことです。被害のあり様を自分の目で見た衝撃は大きく、コンクリートの耐久性に関わる研究の重要性を改めて痛感。研究を社会にどう生かしていくべきか、それまで以上に真剣に考えるようになりました。

スモールステップを 重ねる喜びを大切に

2013年、北海道大学に着任。在任中には1年間、アメリカ留学も経験し、2018年に立命館大学に赴任しました。愛知県から東京、北海道、さらにアメリカ、そして滋賀県と、さまざまな場所に赴くことになりましたが、それも楽しんでキャリアを重ねてこられたと思っています。

現在は、コンクリートの圧電効果に関わる研究の他、新たなテーマにも取り組んでいます。その一つがアメリカ留学中に教わったカーボンナノチューブを混ぜ込んだコンクリートの研究です。日本の建築業界ではほとんど使われていないこの材料の可能性を検証しようと試みています。また最近、セメント系材料が多く使われている建設用3Dプリンタにも研究範囲が広がっています。専門分野を横断するテーマもあり、今後は立命館大学の他分野の先生と連携した研究も増やしていきたいと考えています。

学生を指導していると、完璧を求めるあまり、立ち止まったり諦めたりする人が多いことに気がつきます。「優秀でなければ研究者になれない」と尻込みしている人がいるかもしれませんが、けれど最初から完璧である必要はないと思っています。失敗し悩みながら何度も繰り返すことで理解が深まり、より質の高い研究につながっていきます。私自身の研究者人生も、そうした試行錯誤の繰り返しでした。研究者を目指す皆さんにも、スモールステップを積み重ねていく大切さや喜びを知ってほしいと思っています。

Case #03

迷い、悩んだ 道のりが 今に つながっている

福山 智子

理工学部 准教授

Profile

2004年、名古屋大学を卒業、2010年に東京大学大学院工学系研究科博士課程を修了。2013年、北海道大学に着任。2016年から1年間、アメリカのワシントン大学、コロンビア大学で研究する。2018年、立命館大学に着任。



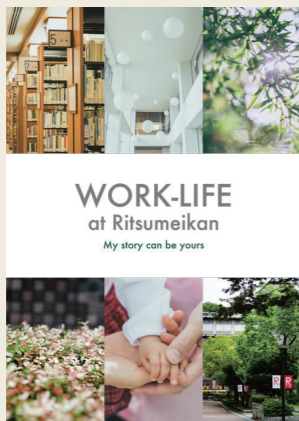
リサーチライフサポート室出版物および ライフイベントに関わる各種制度の紹介



出版物の紹介

WORK-LIFE at Ritsumeikan

立命館大学での研究者生活の紹介冊子。育児休業や学内保育園・臨時託児室を利用する研究者、介護を経験している研究者、FDプログラムを受講した教員の姿を紹介しています。



ライフイベントに関わる制度のご紹介

ライフイベントと仕事との両立支援のための各種制度の一部をご紹介します。
制度の詳細、その他の妊娠・出産・育児・介護に関する学内諸制度は下記URL よりご確認ください。

ライフイベントに 関わる研究支援員制度

妊娠、育児、介護のライフイベントと、研究活動を両立できるように雇用の「研究支援員」の雇用経費を1期(6ヶ月)につき上限30万円まで助成する制度です。

研究支援員の 業務内容

- 研究者の実験・調査の補助
- データの入力・分析
- 文献の収集・整理
- 学会発表の資料作成
- その他研究についての補助



ライフイベントに関わる
研究支援員制度の詳細はこちら
<https://www.ritsumeai.ac.jp/research/rsupport/research/research.html/>

育児・介護を サポートする制度

ベビーシッター/ ホームヘルパー利用補助

業務の都合により、家庭での育児／介護が出来ない場合に、ベビーシッターや一時預かり保育の利用／ホームヘルパーの利用を、年間6万円を上限に補助します。



立命館大学
「人事WEB」はこちら
<https://secure.ritsumeai.ac.jp/staff-all/unitas/hrweb/>

介護を サポートする制度

介護休暇

要介護状態にある家族を介護する教職員が取得できる休暇です。対象家族の通院などの付き添い、介護サービスの提供を受けるために必要な手続きの代行など、年間10日以内を上限に取得することができます。

介護休業

要介護状態にある家族を介護する教職員は介護休業適用を受けることができます。対象家族1名につき、通算して365日(雇用期間を超えることはできない)の休業期間を取得することができます。

配偶者の妊娠・出産を サポートする制度

出生時育児休業(通称:産後パパ育休)

出産した方のパートナーがこれまで以上に休暇を取りやすくするための制度です。従来の育休とは別に、生後8週間以内に休みが最大4週間取得可能となります。まず出産に立ち会うために1週間休み、その後期間をあけて、再度1週間休みなど2回に分けることもできるようになります。(2022年10月1日より施行)

配偶者出産休暇

パートナーの出産に伴う入院・退院後の子の世話や出産に伴う諸手続きのための休暇制度です。第1子誕生時には2日以内、第2子以降5日以内の休暇を取得することができます。